

大藏虎政と平尾

関屋俊彦

はじめに

大藏弥右衛門家いわば狂言大藏流宗家の十一世大藏虎政は、戦国大名の織田信長から「虎」の一字を拝領し、のちの大藏家の名乗り「虎」をつける基を開いたとの伝承で知られる。又、山城国相楽郡平尾に土地を拝領したとも言われている。私も先に「大藏弥右衛門家蔵『預ヶ道具覚帳』について」(関西大学『国文学』第七十八号・平成十一年三月十四日)の中で、平尾村の用地覚帳について触れたことがある。その時、平尾とはどんなところなのであろうかと興味を抱いた。この伝承を確かめるべく現地調査をし、ついには虎政の墓が十輪寺にあったことを現二十四世宗家大藏弥右衛門氏(明治四十五年生まれ)のご好意により、大藏家で見出した資料と突き合わせて確認し得たことを報告するものである。又更には長命猿楽との関わりについても考えてみたい。

一、虎政について

大藏虎政について、簡潔にまとめてくれているのは古川久・小林貴・萩原達子編『狂言辞典 事項編』(昭和五十一年・東京堂出版)であろう。すなわち、「大藏弥右衛門虎政」の項目に次のように記す。

享祿四(一五三二)―慶長元(一五九六)・三・一七。大藏流狂言師。宗家一世。初名、弥太郎。姓は今春とも。織田信長から「虎」の字を拝領、虎政と名乗り、以後代々家元および宗家出自の者は、名乗の一字には「虎」をつけることとなる。初め岐阜に住んだが、のち山城の国相楽郡平尾に屋敷田畑一五ヶ所を賜って移住。信長のあと豊臣秀吉に召し出され、文祿年中(一五九二―九五)の九州名護屋での演能や禁中などにも、鷲三之丞・長命甚六らと再々出動している。『近代四座役者目

録』今春方近代狂言師之事には「日吉滿五郎弟子筋也。牛蓮（金春八郎安照）代マデスル。大方ノ上手ト云」とある。平尾で没。享年の六六は確からしいが、没年については『わらんべ草』には「戊三月十七日」すなわち慶長三年（一五九八）とし、

『雲上散楽会宴』（親世宗家蔵）は慶長五年と記していて、再考の余地がある。法名、聯芳菴永翁道春居士。菩提寺、奈良市・蓮長寺。弟子に長命徳右衛門・甚兵衛らがあつた。

蓮長寺については私も「狂言大蔵流（日本の家元）」（『歴史と旅』昭和五十九年・秋田書店のちに拙著『狂言史の基礎的研究』九四年・和泉書院に再録）で調査したことがある。

さて、右に引用する資料の中、菩提寺を中心として確認しておきたいのは次の四点の資料である。

- A 大蔵弥太郎虎政、後、弥右衛門ト号。従信長様虎ト云字を被下。従是虎ヲ名字ニ付。法名道春。山城国、平尾ニテ卒ス。中比美濃国、岐阜ニ住ス。行年六十六、戊三月十七ニ卒ス。虎政ノ弟子ニ、長命徳右衛門十五ヨリ取立シ也。同弟甚兵衛。『わらんべ草』（『国語国文学研究史大成』謡曲 狂言）

増補版は昭和五十二年・三省堂所収）

B

狂言太郎
大蔵弥右衛門虎政

琴姫

此代、信長公より虎之字被下、夫より代々実名ニ付申候。山城国相楽郡平尾村二住居仕候。右屋敷田畑十五ヶ所、信長公より被下御朱印外二者知行仕候。

「大蔵弥右衛門家由緒書」（能楽資料集成『重修猿楽伝記』昭和五十六年・わんや書店所収）

C 大蔵弥太郎虎政

後、弥右衛門ト号。従信長様、虎ト云字ヲ被下、自是虎ヲ名字ニ付。法名道春。山城国平尾ニテ卒ス。中比美濃国岐阜ニ住。後、平尾ニ住ス。（安田文庫旧蔵「狂言大蔵系図」）

右は大蔵虎明自筆。川瀬一馬氏『権園』のちに『続日本書誌学之研究』（昭和五十五年・雄松堂）所収の「大蔵八右衛門の狂言伝書」の紹介で知られる。今回、法政大学能楽研究所鴻山文庫で確認し、句読点は任意にうった。なお、大蔵弥右衛門家所蔵の系図も次のDのような没年・法名を記し、本文もほぼ同一である。

D 虎政に就いては、平尾に生れ、慶長元年三月十七日に平尾に於いて卒し、法名永翁道春、壽六十六とある。清光院（筆者注、品川東海寺中。岡田紫男氏自筆稿本）に後から、道春・道倫・道徹と三代夫婦追善の爲建立した墓石には、表面に、

聯芳菴永翁道春居士 慶長元丙申三月十七日

普照院和溪妙玉信女

とある。そして又、系図に據れば虎政には

大藏又藏 平尾に而生、二十二歳にて死、法名道善。

大藏弥太郎虎清（註、略す）

嶋岡弾正 当時、大藏弥惣右衛門先祖、名日念。

女、長命次郎太夫夫妻

の四子があったとし、（後略）

右は、川瀬一馬氏『日本書誌学之研究』（昭和十八年六月十日、

大日本雄弁会講談社）による。なお、清光院は禅宗で、品川区南品

川四丁目にあり、大藏家の墓地は金春家の墓地と背中合わせてある。

両家の濃いつながりがうかがえる。

ここで、虎政と平尾の問題を絞りこんで再確認すると、大藏弥右

衛門家藏『預ヶ道具覚帳』には次のようであった。

一、平尾村 田地覚帳 延宝六年 式

入用帳 少二月吉日

解題には次のように書いた。

「平尾村／田地覚帳」には延宝六年（一六七八）の記述がある。

平尾村は虎明の生家である。先の「家之系図」の虎明の項に

「生国者、山城国平尾」とあり、十一世の項にも「山城国平尾

ニテ卒ス」とある。藤岡道子氏は「狂言大藏虎清考」（『能 研

究と評論』12・昭和五十九年五月十五日・月曜会）で「平尾に

ついて八右衛門家伝来の『狂言始り』（筆者注、安田文庫所蔵。

川瀬一馬氏『日本書誌学之研究』に紹介される）には「山城国

相楽郡平尾村住居仕候右屋敷田畑十五ヶ所信長公ヨリ被下御朱

印外ニテ今ニ知行仕事候」とある」と紹介された上で、「美濃

国岐阜（筆者注、虎政の元の居住地）そして山城国平尾という

居住地が、おそらく時の実力者織田信長との関係であったこと

は系図の文言から推測される」とされる。

二、志賀説と十輪寺

大藏虎政が伝承であるにせよ織田信長から下賜された平尾とはど

こだろうか調べ、それが現在の京都府相楽郡山城町平尾であるこ

とはすぐわかったが、上田正昭氏監修『山城町史本文編』（昭和六

十二年三月三十一日・山城町役場）に次のような記事を見つけて仰

天した。

また平尾には狂言師として知られる大藏家の所領があり、現

在でも墓が残っている。

第四章「近世の内実」第五節「習俗と文化」中、「芸能と旅の隆

盛」の段で「神事能と長命茂兵衛」の項目に記されている。奥付の

「執筆分担」から察するに、中津川敬朗・木村和智・印南敏秀・水

戸政満のどなたかが書かれたものであろう。しかし、「現在でも

墓が残っている」と、いとも簡単に書かれてあるが、狂言研究家の間では知られているものではない。そこで、本学史学科の飯田貫氏を通して山城郷土資料館の田中淳一郎氏を知り、更に山城町教育委員会の八田達男氏を介して、それが記されている元の資料のコピーを手に入れることができた。しかし、出典不明のまま私事で長期間中断することになってしまった。その後、墓発見者とされる東村精一氏のご子孫である清氏のご教示で、それは志賀剛氏『日本芸能の主流』（昭和四十六年十二月二十五日・雄山閣）であることがようやくわかった。

第七章三（八）狂言大藏家の墓に次のようにある。「」内割注。

金春系の狂言の家元大藏家は禅竹の子四郎次郎から出ているが、その家は相楽部（筆者注、郡）棚倉の平尾で、薪の東約八杆の所である。有名な虎政道春は「平尾ニテ卒」し、虎明は平尾に生れている。この地の十輪寺の墓地で大きな大倉家の墓が発見された。それには「大倉家累代之祖神〔柳岸立利尊比古〕とあった。建碑は明治三十三年のものであるがその下には江戸中期の年号の入った教基の祖先の墓がたくさんあったから同家の累代の墓であったことが知られる。これによって同家が平尾の名家であったことが窺われた。

注として「発見者は平尾の東村精一氏である」とあり、墓の写真が

掲載されている。

志賀剛氏の同書は昭和四十六年発行と比較的新しい。帯封には上田正昭・西山松之助・三隅治雄・木代修一の各氏が推薦人になり、柴田実氏が「先覚の定説を破る学会矚目の新研究」として推薦文を寄せている。にも関わらず、従来、能楽研究者の間では取り上げられることは少なかった。いや殆どなかったと言ってもよからう。確かに通読してみても思い込みの激しい論であるとすぐ了解できる。芸能の発生を薩摩に置き、能楽では大和四座の中、金春・宝生・観世は田辺町に由来していると説く。その方法は昔の地名と現在の地名を無理にこじつけたものである。通説にはなりようもない、まさに奇書である。さりながら、篤実¹に資料を集めていらっしやったのは確かで、部分的には修正を加えた上で、見直されてもよいのではあるまいか。少なくとも大藏家に関してとは思い直し、いずれにしても現地調査を試みることにした。

十輪寺は『市町村区分 全国寺院大鑑』（平成三年・法蔵館）によると京都府相楽郡山城町平尾西ノ辻にある真言宗光明山十輪寺のことである。JRの「棚倉」から東へ徒歩十五分の距離である。平尾は京都府ではあるが、奈良市に極めて近く南都文化圏に属す。往古、恭仁京の右京端に位置し、「山城の井出の玉水」（伊勢）と歌われた玉水は隣接する。足利義満は応永元（一三九四）年三月十二日、

興福寺の法会を見物するため山城町を通り過ぎてゐる。しかし、周辺を歴史上有名にさせたのは正長元（一四二八）年の山城国一揆であつたであらう。なお、能楽関係では隣村の椿井松尾神社には江戸時代に能舞台があつたことが近年知られるようになった。

十輪寺ご住職大崎快皓氏のご母堂に連絡が取れ、お会いすることができた。そして、地元の大倉家のご子孫である小島昭氏にご紹介いただき、氏のご案内で墓を確認することもできた。『日本芸能の主流』に掲載されている写真と変わらぬ付まいであつたが、いかんせん長年月の風雨に曝されて墓碑の表面はほとんど剥落し読み取ることが不可能に近い。十輪寺で拝見した過去帳によつても大倉家は化政期を溯るものではない。昭氏も家にはならん狂言関係の資料は伝わっていないとおっしゃられる。家紋（『重修猿楽伝記』では狂言大蔵家は「藤之丸御紋」）も一致しないようである。『わらんべ草』でも不統一だが「大蔵」と「大倉」の相違もやゝ気にかかる。東村清氏も当時の事情についてはならん聞いていないと言ふ。思うに恐らく当時地元では評判だつたらうが、大倉家の石碑が建立された明治三十年代は狂言師大蔵家の空白の時代でもあつた。話題は大蔵家には伝わらなかつた。いずれにしても狂言師の大蔵家と平尾の大倉家とを結びつけるのは、この時点では慎重であつた方がよいと判断した。なお、十輪寺では先代のころ、金春氏が謡を教えに來ら

れていたという。奈良との近さが思われたことである。

三、墓地図

糸で調査はいったん長期にわたつて中断せざるをえないこととなつてしまつたが、その後、報告を兼ねて大蔵弥右衛門氏を訪れたところ、氏は御蔵書を整理されていて十輪寺に関わる資料を見付け出されていた。「大蔵家祖先之地」と氏自ら標題された封筒には六枚の史料が入つていた。それは次の通りである。仮見出しを付け「」で記した。読み方の読点は任意、は行替、数字は縦横寸法。

①城州相楽郡平尾邑光明山

十五ヶ所 西福院十輪寺

全資 清藏

古墓地八寺々東ノ方二有之

狂言弥太郎古墓其地二在ル

九月十一日 平尾 かせや
中の惣七

中谷兵助

松本庄三郎

②「十輪寺ならびに里屋敷地図」一枚（図1参照）
住輪寺とある西方向に「此間巷丁斗、寺より戌亥方」と示し、

「十間斗」「七間斗」四方で「里屋敷と申候、大蔵屋敷共、狂言田共申候」とある。さらに西には「氏神」がある。

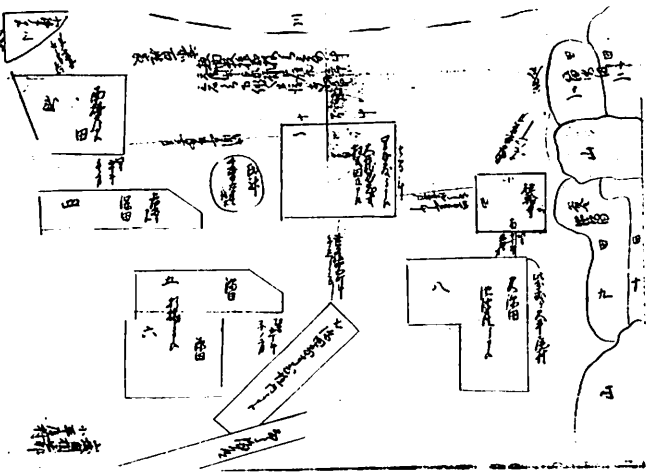


図1

③「道春ほか墓六基図」一枚(図2参照)

「六人様、西向、道春斗拝見申候」とあり、その下に六基の墓が描かれている。「天正五\道春\十月十三日」以外は「見へ不申

候」と記す。

④「包み紙」一枚。

慶應四辰年

持退長持之内ヨリ見出ス事 虎長

平尾村石塔写

⑤「石塔写」計三枚。

a 長治元年三月之塔

b 永享七年三月之塔

至天保五年四百年

c 年代不知塔



図2

至天保五年七百三十一年

⑥「奈良地図」 325×230と323×230の二枚続き。

以上六点の資料には平尾の資料と奈良の資料が混在しているので、ここで整理しなければならない。⑥は「中川村／此間奈良山領」とか「川上領」の記述があるので、その後、移住した奈良の領地周辺を記す史料である。④は①、③に関わるものではなく、本来⑤の包み紙であろう。慶應四（一八六八）年すなわち明治元年の写しである。虎長は二十二世大藏虎年（若名、千太郎・虎長。明治十四年四十一歳没）のこと。⑤には長治とか永享というとてもなく古い年号が記されている。十輪寺にせらしきものはない。④には「平尾村石塔写」とあるので平尾に本来は存在していたようだが、現在ではわからないようである。大変興味深い史料であるが、④⑤⑥は今、直接関係のない史料なので詳しい考察は後考に俟つ。

①は、狂言弥太郎の墓地に関する報告書であり、②③と関わる史料であると思える。「西福院十輪寺」とあるが、西福院と合併したことからくるものだそうだ（こ住職「母堂談話」。「清巖」は、十輪寺住職の名である。十輪寺は、平尾にあっても室町時代まで溯る唯一の古刹であるが、明治初頭に無住の状態があったこともあり、代々の住職については判然としないようである。幸い『會月鑑』なる歴代住職の過去帳があったので、それと照らし合わせることで

きた。經文のあとに次のように記す。

嵯寛政十二年歳旅庚申春王毅且

城州相楽郡平尾邑光明山西福院十輪寺住

全資 大輪清巖

謹誌

すなわち、清巖は寛政十二（一八〇〇）年の人で、従って、②の史料も寛政のころ書かれたものであらうと思われるのである。ちなみに、報告者の名に連ねられている「中」（中野）姓は庄屋で、「中谷」姓は湧出神社の神主であるとは、こ住職「母堂のこ教示である。「かせや」は同寺過去帳の文化三年に見える「かせや惣七才（三、お七）」らしく、「かせや」は中野のことのようである。いずれにしても平尾という土地代々の人々の名が連ねられている訳である。寛政のころの大藏弥右衛門家は、文化元（一八〇四）年没の十八世の弥太郎虎里か、すぐ続いてなくなっている文化二年没の十九世の弥右衛門虎寛に相当する。文書には「狂言弥太郎」とあるので虎里の方であろう。

②に見られる住輪寺は「住」の字を当てているが、平尾の十輪寺のことであるのは明白である。十輪寺の西一丁のところに里屋敷・大藏屋敷・狂言田と呼ばれた十間×七間四方の領地が示されている。この里屋敷や東端の「笛吹」などの地名は現在の平尾周辺の住

宅地図と比較してみても一致する。「氏神」とあるのは、のちに記すが湧出神社のことである。ちなみに、大藏弥右衛門氏からは現地を訪れられた時、十輪寺近くの土地の人から周辺が「狂言田」と言われていることを聞いたとお話されていた。現在は住宅街になっているが、まさに『重修猿楽伝記』所収「大藏弥右衛門家由緒書」に記されていた屋敷は確認されたと言ってよい。なお、地元の大倉氏は代々このあたりに居を構えられていたという。

③は六人の墓の絵である。「道春」は十一世大藏虎政の法号である。虎政の没年については先に見たように、慶長元年・三年・五年の三説ある。過去帳の類に従って、私は慶長元年説をとりたいが、いずれにしても墓碑銘の「天正五(一五七七)年には合致しない。子の虎清は永禄八(一五六五)年生まれなので、天正五年でも矛盾するものではない。施主としての碑とも思われるが、そうした風習がないのならば、のちに述べる湧出官の勧進狂言が行われたとされる天正二十年とは全く矛盾する。二十二歳でなくなったとされる子息の又蔵の号道善を見誤った可能性が高いとも思われるが、なお後考に俟たざるをえない。ともかくも、寛政のころの報告書には少なくとも十輪寺に狂言大藏弥右衛門家の墓があると認識されていたものであろう。ほかの五基は「道春斗拝見申候」とあるように、すでにわからなかったようである。私も注意して寺の墓碑銘をひとつひ

とつ見てみたが似たような墓の一群はわからなかった。実は十輪寺墓地には中央に無縁仏の石碑が山と積まれている。あるいは、その中にあるのかも知れないが、私の力の及ぶところではない。

十一世の時、先述した『わらんべ草』などに信長から「虎」の字を拝領して以来、大藏家では代々虎の一字を名字に付けているとの伝承がある。信長から拝領というのは確認できないが、大藏家の継承者は法号の一字に虎の字を使用しているのではと思ひ、「十輪寺過去帳」をもう一度拝見させてもらった。そして、ある家の方には確かに極端に虎の字を使われているが、せいぜい化政期までで古く溯れるものではないので、これで証拠とする訳にはいかない。しかしながら、地元の方々に伺えば何うほど、各家間の係累関係は濃いようである。漠然と平尾地域の人々は地元の大倉一族を中心として狂言大藏家と関わっていたとも言えるのである。

四、知行

十三世の虎明は、『わらんべ草』によると「生國者、山城国平尾」(本文は国語国文学研究史大成『謡曲・狂言』による)とあるので、十二世の父虎清と共に平尾に住んでいたことはあつてけることができる。しかし、その後は、奈良・江戸に移り、現に菩提寺も奈良市の蓮長寺である。平尾とはまったく無関係になったかのよう思わ

れた。しかし、どうやらそうではなかったようだ。すなわち、虎政の時に平尾に領地をもらっている訳だが、明治になるまでその土地はいわゆる知行の対象となっていたようである。

法政大学能楽研究所宝山寺文書に大蔵千太郎関係の次のような一群の文書がある。文書の宛名である大蔵千太郎とは、先にも触れたが、二十二世の大蔵虎年のことである。／＼は行替。読点は任意にうった。

慶應三五年十二月

御上納目録

青山様方

御高三石壱斗式升

御物成壱石壱斗

内

一 壱斗

翁壱石

右之通御上納仕候、以上

慶應丁卯年十二月

大蔵千太郎様

御役人衆中様

別に控えと思われる右と同一内容のものが一通ある。

半樽／役人

但、検見受取

半樽／塩米被下

御納高

半樽／源四郎

御納／喜十郎

さらに、「明治元戌年十二月／御下ケ米／御下ケ銀目録／少付村／

役人」と「明治元戌年十二月／御上納目録／半樽／役人」とが合綴されているものに次のようなものがある。

御高三石壱斗式升

御物成壱石壱斗

内出

一、五升

庄屋給米被下、

当年者不作三付壱斗／之處、半減御下相成

残而／壱石五升／内

一 九斗

当五月降続や、実乗り／悪敷候三付、為銀被下

置

一 差引残而／壱斗五升 御納米

右之通、奉御上納候、以上

明治元戌辰年十二月 半樽／喜十郎

大蔵千太郎様

御役人衆中様

これも若干の異同はあるものの、別に控えと思われる右と同一内容のものが一通ある。

右の資料と同じく明治元年の報告とされるものに木村礎氏校訂

『旧高旧領取調帳・近畿編』（昭和五十年三月十五日・近藤出版社、

宮本圭造氏(ご教示)「山城国相楽郡」の項には「平尾村 大倉弥太郎知行 三・一二〇〇石」とあった(算用数字は漢数字に直した)。ほかの資料だけでは金春家が代表して受取ったものを大蔵家に渡していたとも考えられるところであるが、本資料によって大蔵家知行であると言える。

そして、これらは『山城町史 史料編』(平成二年三月三十一日発行)の「棚倉区有文書」とも関わってくる。第四章第一節に「明治四年(一八七二)六月、平尾村で村柄明細帳が作成され、京都府に提出される」とあるものである。

一、高三石壺斗式升

大蔵千太郎

上知

内

三升五合六勺

永荒引

残り高三石八升四合四勺

なお、『京都府相楽郡誌』(大正九年・京都府教育会相楽郡部会初版発行・昭和五十九年臨川書店復刻版発行)に「天保五半年相楽郡高附調」があり、平尾村には大蔵の該当者は書かれていないが、同書は全体で見ると大領主ばかりの名が連ねてあり、たかだか三石程度では記されなかったであろう。又、先述したが、大蔵弥右衛門家蔵『預ケ道具覚帳』には、下半分が欠けているとは言え、延宝六

年の用地覚帳があった。

これらから考えてみると、大蔵虎政の時に平尾の土地を拝領し、それは江戸時代を通し明治初期に至るまで不作とか一部荒地地になったとは言え、ともかくも領地は安堵され上納米が上がっていたものと言える。言うまでもないことだが、従来知られている大和添上郡や江戸に屋敷・土地を拝領された上でのことである。ちなみに『旧高田領取調帳』の添上郡中ノ川村に「大蔵千太郎領 六四・二石」とある。

五、湧出宮

大蔵虎政は、天正二十(一五九二)年九月十八・十九日に山城の和岐神社で勸進狂言を催している。明暦元(一五六六)年、大蔵虎明筆『明暦堺七堂狂言芝居』(『日本庶民文化史料集成第四巻狂言』一九七五年・三一書房発行所収)がその記録である。次のような序文を持つ。読みやすさを考え適宜漢字を当て、誤字は直した。

仙溪道倫常にかたりしハ、予かおうち道春ハ、山城国玉水のあたり平尾と云里に住まれし時、所の氏神和久の森の大明神といへるかたつ田舎なれと大社あり、予かためにも氏神にて、ことに楽頭なり、折節大破に及ひしを嘆き、上葺のため、勸進狂言を宮の前拝殿にて二日せられし時、大蔵道知・同名平蔵・幸

月軒など、遠類なれは見廻にまいられ、楽阿弥の囃子を請ひ受けて、平蔵・月軒・長命吉右衛門囃されしと、度々語りし。其時なるこの狂言のはやし、月軒一調鼓にてうたれし時、云合いたされしゆへ、今に幸の家の秘事に致すと聞侍りし。二日の狂言組、ふるき反故の中に有へしとて、かわこの内をたつねられしかと、ミへさりしかハ、口つからかたられしを聞、かき置し事なれば、あとさきのちかいあるへけれど、なきにハしかしと書ける物ならし。

文禄元年 九月十八日ハ毎年和久の森の大明神の御神事なり。此日より翌日まで二日、翁式三番、両日ながらありしとなり。翁ハ長命二郎太夫、拍子ハ道知・月軒の弟子祢宜衆なり。狂言ハ次第詳しく覚えす。初日の脇狂言ハ、末広かり、二日の脇狂言ハ松脂、此外ハ常にする狂言ともにて、珍しきことハなかりしといわれし。一日二一番つゝ、さかもりの有狂言ありて、順の舞ありしと聞しなり。番数ハ一日に十三番と覚えしと申されし。

狂言の役者ハ、道春・道倫・長命徳右衛門・同甚蔵・同弥七・祝園の千介・祢宜とつは、同宗助・同九郎右衛門・同津守、其外も祢宜若き衆出しと聞し。

松田修氏は「文禄元年勸進狂言小考」(『藝能史研究』二十七号、

一九六九年七月三十日)において、この勸進狂言は虚構だとされた。論点を整理すると、平尾は玉水のほとりと称するには遠距離であること、文禄元年は正確には天正二十年であること、神社文書に九月十八日前後の祭事がまったく見当たらないというのがその理由である。

しかし、玉水はJ Rで言えばひと駅であり、言われるほど遠いものではない。道倫すなわち虎清が虎明に語って聞かせたのは、彼らがすでに奈良もしくは江戸に移っている時と思えるが、祖父虎政の思い出を語るには、和歌名所である井出の玉水を引き合いに出すのがわかりやすかったのではあるまいか。又、昔の人は氏が想像される以上に健脚であったと思う。私は平尾が山城とは言え、奈良に大変近く、彼らはしょっちゅう行き来していたいわば奈良文化圏にあったとも思っているものである。

次に年代の誤認であるが、今でも明治から大正のように改元の年はおおざっぱになることもあるのではあるまいか。現在のようにきちんとした年代の把握であったとも思えない。しかも残念ながら「皮籠の内を尋ねられしかと、見へさりしかハ」の文書であった。これを管理・記憶がいまいであるとは咎めるのは酷であろう。

次に神社文書に九月十八日前後の祭事が見当たらないのは確かである。しかし、氏は、この勸進狂言を大がかりなものとしてとらえ

られすぎたのではあるまいか。私も当初、勸進というからには一代能のようなものを想像していた。だが、本文に「宮の前拜殿にて」とあるように舞台は拜殿であった。これならばなにも舞台を野外で組み立てる必要もない。既存のものを利用したにすぎなかったのである。更に、神社文書には氏が見落とされてきた長命猿楽が参加していた祭の文書がある。のちに述べるが虎政が長命猿楽と深い関わりを持っていたとすると、これは大きな意味を有する。

なお、『明暦堺七堂狂言芝居』の原本は山本東次郎家蔵であるが、虎明自筆であることを考えれば明治十四年、二十二世の虎年がなくなった後、東次郎家で預かった一群の宗家資料の中の一冊であることを考えれば、内容的にも信頼は置けるものである。

三十年以上も前の論をあげつらうのは差し控えるべきことかもしれないが、氏のこの論が短文だったとは言え、当時の氏の華やかな存在を考えれば、その論の影響は大きかった。敬して遠ざける面もあった。結果論からではあるけれども、失礼ながら批判せざるを得ないものである。

この和岐神社こそ今の湧出宮のことである。山城町平尾字里屋敷にあり、十輪寺とはすぐ近く、先述した「十輪寺ならびに里屋敷地図」の大蔵屋敷の西側にある「氏神」とされるのがそれである。延喜式内社で、正式名称は和伎座天乃夫岐売神社、通称湧出宮と言う。

本稿も通称に従う。「平尾の東部、国鉄奈良線棚倉駅のすぐ東にひろがる森の中に鎮座する。この森は一夜にして湧出したとの伝説があり、そのことから当社は湧出宮と呼ばれてきた。祭神は天乃夫岐売命・市杵島比売命・田擬比命」と書き出される植木行宣氏執筆「和伎座天乃夫岐売（わきにまあつゑ）神社」（『日本の神々』神社と聖地―第五巻山城・近江』（一九八六年八月二十日・白水社）が概説として親切であると思われる。古文書には和岐・和伎・和支・勝・ワキと様々な字が当てられた。植木氏稿にも次のようにある。

文永十年頃のものとしてされる施行人数注文（金沢文庫所蔵『金毘羅抄』第一裏文書）に「脇森宿」の記事がある。中世にはワキ社と呼ばれ、奈良街道に沿う「脇森」に鎮まるものであったことが知られる。

すなわち、『明暦堺七堂狂言芝居』に「和久の森」とあるのも「脇森」で、私に考えるに「湧くの森」に通じるのであろう。湧出宮は湧出に様々な当て字がされたためもあり、居籠祭の方は有名であるが、能楽とは遠いものと思われていた。松田修氏も「和久の森の明神」は湧出宮であると初めて確認されたにも関わらず、虎明の言は「偽証」であるともされた。

湧出宮宮司の中谷勝彦氏のご好意により、次節に述べるが、長命猿楽の記される文書を確認し得た。虎政が勸進狂言を行なった拜殿

は本殿前にはほぼ当時の形のまを伝えてゐる（中谷氏談）。

六、長命猿楽との関わり

平尾は、長命猿楽と深い関わりを持ってゐた、狂言の大蔵家も長命猿楽の流れにあつたことを更に推し進めようとするのが本節である。

長命猿楽は山城猿楽であつたとされたのは表章氏の「長命猿楽考」

（『永島福太郎先生退職記念 日本歴史の構造と展開』一九八三年

一月二十日・山川出版社）であつた。すなわち、それは後藤淑氏が

『中世芸能の展開』（昭和三十四年・明善堂書店）で述べた長命猿

楽鎌倉起源説を批判するところから出発するものだったが、結論は

長命猿楽は山城猿楽であつたと主張された最初のもので画期的なも

のであつた。そして、その大きなきっかけは、伊東久之氏「棚倉・

湧出宮 居籠神事と宮座」（『藝能史研究』第三十一号、昭和四十五

年十月）が紹介された栗田寛著・栗田勤校訂『神祇志料附考』上巻

（昭和二年六月二十五日、皇朝秘笈刊行会）の「和伎坐天夫伎売神

社」の項、「文明四壬辰年九月御神事祭礼定之事」であつた。湧出

宮文書の写真で確認したところ、それは尾崎座の「湧出森惣社大明

神之流記」のことであつた。念のため平尾の地名が見られる前後を

同文書に従つて抜き書きする。「」は割注。／＼は行替。

一、騎射 平尾沙汰人衆「（總職）」が被出候

一、步射座 平尾村步射座が出之

右馬場揃へ之者也

一、駕輿丁 綺田南村が出スもの也

一、楽頭長命孫六太夫

楽頭禄米合三石八斗六升四合

但し禄升也

右時之兩郷年行事惣奉行衆が

出サルゝモノナリ

右所定置之条如件

文明四壬辰年九月十日

惣在侍衆中

活字本では「長命孫太夫」となつてゐるのが、同書では「長命孫六太夫」となつてゐる点など活字本とはいささか異同がある。それはさておき、表氏は「長命孫大夫の和岐神社祭礼楽頭職保持は（中略）文明四年をかなり溯る頃からのはずで、それは彼が山城に古くから地盤を持つ猿楽の一人だつたからこそ獲得できた権益と解される」とされる。青森透氏「南山城における二つの翁猿楽」伝承からの復元的試み」上・下（『芸能』第二十七卷第十一・十二号、一九八五年十一月・十二月、芸能発行社）は、幸王家文書15号年月日未詳「連名書」（『神戸市文化財調査報告書26神戸の民俗芸能 灘・葺

合・生田編」を引き、一歩進められ、長命家は近世上粕郷に居住したとされる。それらを受け、『山城町史』に「天正期の上粕村には四人の猿楽者が住んでいた【実証】雷正考】」。確証はないが、この中に長命茂兵衛がいたかもしれない。いずれにしても当地は中世以来猿楽能の発展と深いかわりを持っていたのである。」とするのが妥当なところであろう。

次に長命家と大藏家との関わりについて考察してみたい。既に、表氏は前述の「長命猿楽考」で、両家の関係は深かったのではないかと示唆されている。理由の一に文祿元年の大藏虎政の勅進狂言の〈翁〉を長命次郎大夫が勤めたこと、二に正保三（一六四六）年の虎清主催の道春（虎政）五十回忌勅進猿楽で、能の大夫には長命次郎大夫が起用されていること（般若窟文庫『江戸初期能組控』）、三に虎政の末娘が長命次郎大夫の妻だったと伝えられること、そして、四に虎政が平尾に住んでいたことを挙げられる。

これは貴重なご指摘だと思われる。屋上屋を重ねるが、『わらんべ草』には虎政の弟子として「長命徳右衛門十五ヨリ取立シ也。同弟甚兵衛」を挙げている。さらに想像を膨らませれば、狂言三流派（大藏・和泉・魁）の接点に立つと言われている万五郎についても考えられることではあるまいか。すなわち、川瀬一馬氏が『続日本書誌学之研究』で引用される『戊戌雜秘録』二の大藏弥右衛門系図

に「金春萬五郎八寶名長命也」とあるが、同書が後代の写本であるとは言え、やはり大藏家と長命家が極めて深い関係を持っていることを意識した上での書き方であると思えるからである。

更に、橋本朝生氏は「大藏流歴代上演記録一覽」（仮題）を用意され、それによると虎政の上演記録は七十回を数える。その中で、秀吉興行禁中能（大倉三忠家文書）を中心として長命弥右衛門を虎政と考えられている。大いに力づけられることである。

長命家そのものについては今触れる余裕はないが、『山城町史料編』を拾い読みしても近世文書が主ではあるが長命姓についてはかなり拾える。たとえば、「天保五年（一八三四）三月、御公儀役者で御祭礼・薪能には三番叟を舞うという由緒をもつ長命茂兵衛が南都への移住を希望」の項目に次のようにある。

一、御殿様御領分山城上粕村西法華株入茂兵衛と申候。往古より長命茂兵衛と申、上粕林村而除地居住仕候、并二除地田・地杯所持仕候。

長命家为上粕（筆者注、「上粕」は十輪寺のあるJR「棚倉」駅からは一駅である）に住み、幕末に奈良移住を希望していたこと、そして何よりも本姓「株入」と言っていたことが目を引く。

まとめ

まとめと今後の課題を簡条書きにしてみる。

一、大蔵虎政の墓は山城町平尾十輪寺にあった。寛政のころ大蔵虎里宛の住民からの報告書があり、六基の墓が確認されている。

但し、墓の存在そのものは確認が取れなかった。現在の大倉家と狂言の大蔵家の関係についてはまだ調査する必要がある。

一、織田信長から拝領されたという土地についても確認された。知行地としての状態は明治初期まで続いた。なお、虎の字拝領を含めて織田信長から云々と言うのは今後の課題としたい。あまりに伝承が複雑だからである。

一、虎政が勧進狂言したと伝えられる和久の森の神社は同じく山城町平尾の湧出神社のことであり、中世文書にしきりに現れる和岐神社と同一であることが再確認された。

なお、地元の大倉姓の者は湧出宮の氏子として同宮文書に散見するが、狂言師大蔵家との関わりを含めて、ここでは断定せずに今後の課題としたい。

一、大蔵家は長命家と深い関わりがあり、長命猿楽に取り入れられていた。なお、史料的な裏づけが課題とされる。

本稿をなすにあたり、本文に触れた大蔵弥右衛門氏・十輪寺・湧出宮の中谷勝彦宮司・八田達男氏ならびに法政大学能楽研究所を始めとして多くの方々・機関にお世話になりました。又、平成十一年十一月の六麓会で報告の場も与えられたことを明記して感謝申し上げます。

なお、平成十一年度関西大学学部共同研究の成果によるものである。

(せきや としひこ／本学教授)